

体験

しよう

発見

しよう

制作

しよう

素材との出会い展

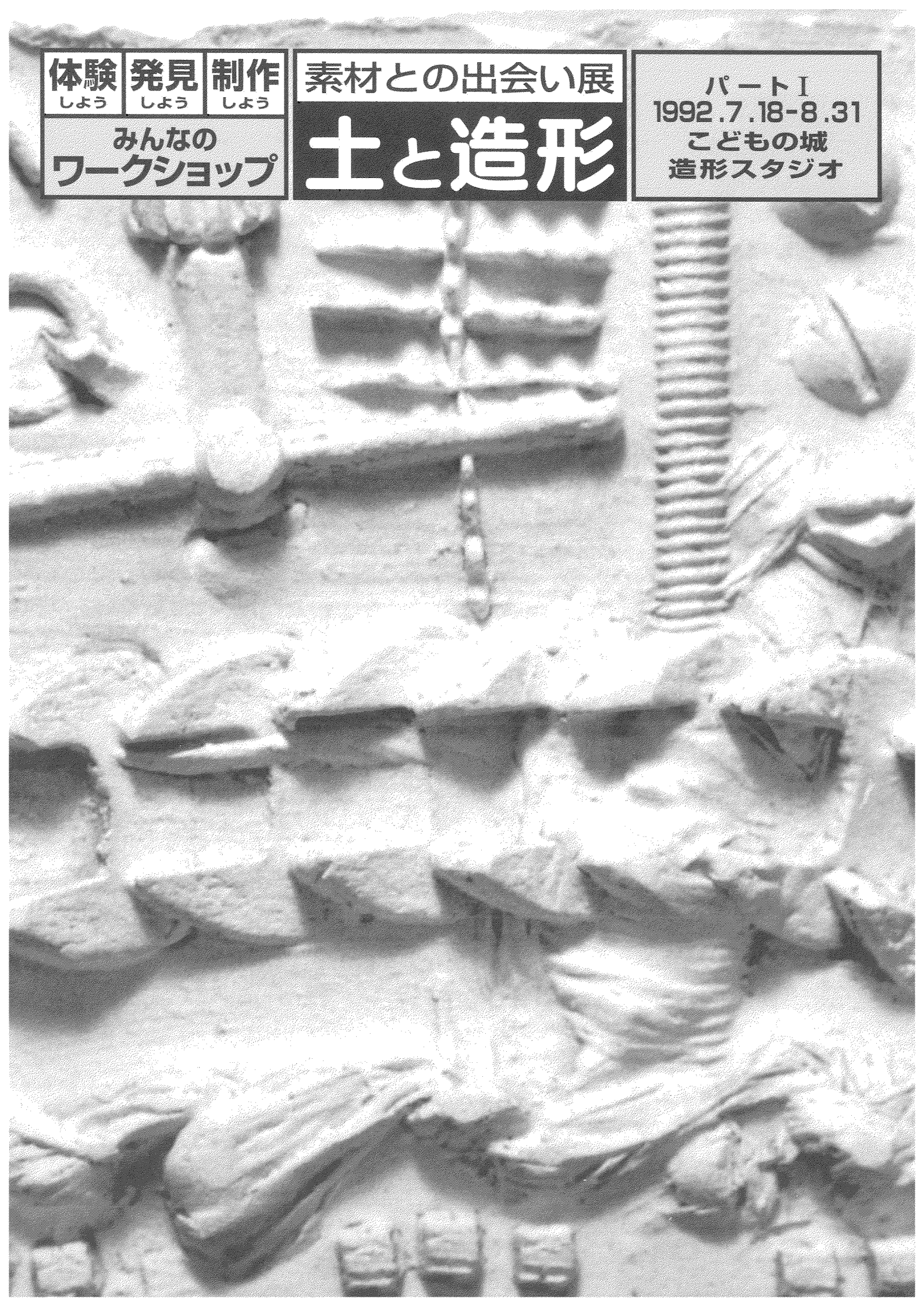
みんなの
ワークショップ

土と造形

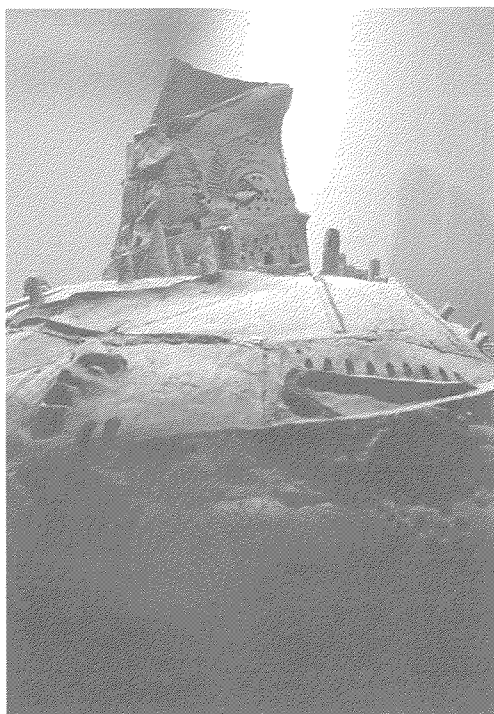
パートI

1992.7.18-8.31

こどもの城
造形スタジオ



夏休み特別プログラム
素材との出会い展 く土と造形～パートⅠ
1992.7.18-8.31



はじめに

地球の表面をおおう「土」は、植物を育て生命を生み出す源ともいえる物質です。その様態は一様ではありません。泥のように液体の状態から、適度な水分を含んだ粘土の状態、そして乾燥をして固体化し、さらに細かな粉状へと変わっていきます。また、火で焼くという過程を通せば、さらにその姿は変化をします。

原始の時代から人類は、柔らかな土の上に絵や模様を描き、粘土を手でこねて土器や土偶や埴輪などの形をつくり、そして住むための空間をも生み出してきました。土ほど私たちの身近にあって、人間の造形しようとする意図を、ごく自然に受け入れてくれる素材は他には見当たりません。この手になじむ心地よい感触や、どのような形にも、何度でも作りなおすことのできる可塑性は、子どもたちにとっても大変魅力的なものです。

素材との出会い展く土と造形～パートⅠでは、土のもつ可塑性に主眼をおきながら、土による造形表現の可能性を子どもたちが実感として体験できるよう、展示・体験・制作のワークショップ環境を設定しました。ここでは、長い伝統を持つ世界各地の“陶芸”のための技術も、新しい視点で捉えなおし、子どもたちの造形体験のための方法としていろいろな形で活用されています。

会場の入口には、手で触って土のもつ表情を確かめられる大きなオブジェや、炎の様子や煙までリアルに表現された「野焼きのジオラマ」などが設置され、視覚や触覚を通して土についてのイメージをたかめます。スタジオでは土を作る、こねる、丸める、たたく、切る、削る、型を押す、磨く、焼くなどの行為から、この素材がもつ新鮮な側面を体験できる制作のプログラムが展開されます。

本企画を実施するにあたり、下記の方々のご協力を得たことに深く感謝いたします。とくに陶芸作家の湯浅祥平氏には、長期間にわたり「子どもと土と造形」のプログラム開発のためのさまざまなアドバイスをいただきました。

1992年7月 こどもの城 造形事業部

発行 こどもの城 初版 1992年7月18日
再版 2002年3月20日

編集 こどもの城造形事業部
TEL 03 (3797) 5662

住所 〒150-0001
東京都渋谷区神宮前 5-53-1

印刷 (有) 博英社

湯浅 祥平 氏 (陶芸作家)

株式会社竹尾

山田ダンボール株式会社

リンテック株式会社

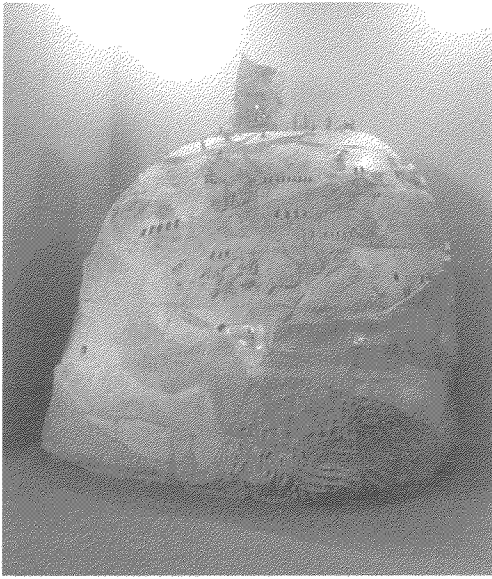
ワークショップ

土は可塑性の優れた造形素材であり、手を使うことによって、人間が人間であろうとし始めた頃より、その感触には何かを作らせたいという意欲を呼び起こすものが、内在しているようだ。土のやわらかさは、人間の造形意欲を強く刺激するのではないだろうか。土は、紙・金属・布などの人の手が加わった素材と違い、大地から直接採掘された自然物であり、砂漠や珊瑚礁以外なら殆ど何処でも手に入る。また、その可塑性ゆえに世界各地で多様性に富んだ焼き物として生産されており、木と同じように昔から食器・玩具・建築物などにも使われてきている。

どろんこ遊びの時に、足の裏でヌルヌルしたり、両手でつかむとニュルニュルと顔を出してくる粘土の感触は、言葉では言い表せない楽しさがある。こんな体験は誰でもがもっているだろう。粘土は、にぎったり、つまんだりするという手や指の動きだけで、簡単に形にすることができる特質、つまり他の素材には見られない特異な可塑性を持っている。子どもは、粘土を触ってその感触を楽しみ、遊び、イメージを広げ、粘土の持つ可塑性が、子どもたちの創造力に刺激を与えていくのである。しかし、粘土がどんなに可塑性の優れた素材であろうと、それは子どもにとって、すぐに有効な形を作り出せる魔法の素材ではない。土の造形に限らず、絵画や彫刻の世界でのそれぞれの作品は、作り手の知識・創造性と培われた技術が調和したものである。しかし、そのいずれも発達過程の子どもに、大人と同じ方法や道具を使い、制作活動を行うことは簡単なことではない。造形スタジオでは、子どもたちが土に触れ、つまみ、ころがし、丸め、たたき、伸ばすという土の基本的な技法と土の持つ可塑性とを、より積極的な活動につなげ、子どもの技量をより効果的に発揮できるように、造形スタジオのスタッフが独自に開発した道具を加えてみた。子どもたちが土の感触に誘発され、土の持つ素材そのもののおもしろさを感じ、何かを作ってみようと心を動かされ、自主的に自分なりの造形体験をしていく。そして、土の持つ可塑性という特性を生かしながら制作していく。

素材との出会い展〈土と造形パートI〉は、土の持つこうした可塑性に主眼を置き、子どもたちが土と出会い、触れ、遊び、土の持つ特質を知り、制作（遊び）のなかに介在する規則（方法）を通して、より充実した造形体験が出来るように環境を設定したワークショップである。





手でみる惑星

ねんどは、やわらかいときには、いろいろなかたちにできます。かわかして火で焼くとかたくなり、こわれにくくなります。
この「手でみる惑星」は、これからみんなが造形スタジオで体験できる、土のプログラムのいろいろな方法をつかってつくられています。目をとじて、そっと手でさわってみてごらん。心の中にどんな場面がうかびますか？



I. 展示

造形スタジオ入口へと続く円形劇場の外壁には、子どもたちが作った「かざりタイル」の陶板一約300枚が展示されている。さまざまな物の表面を、粘土の板に押し当てて作られたタイルの壁が子どもたちを造形スタジオへと誘う。乾燥し焼かれた粘土の板は、硬く壊れづらくなっているが、それぞれの板に採集された形の記録が土の持つやわらかさを伝えてくれる。子どもは、「かざりタイル」の壁を触ってみたいとしようがない。その壁を見ながらきた子どもたちは、スタジオ入口の巨大な素焼きのオブジェに驚かされる。その形は、卵を4分の1に切ったような幅2メートル、奥行き1メートル、高さ2メートルの陶の塊のうえにつののようなものがついている。近づいてみると、その表面には螺旋状に道がある。道を辿っていくとトンネルや橋や階段に出会う。山の頂上に辿り着くことは容易ではなさそうである。それでも子どもたちは目で道を辿っていく。「あつ、こんなところに人の顔がある。」「ここには貝がある。」などと子どもたちの視点は、オブジェ全体へと広がっていく。オブジェ全体を覆うその陶の表面には、風紋のようにやわらかな線の流れや、化石のように隆起したり陥没した貝などがある。それは、まるで何億年もかけて褶曲、断層、侵食、堆積を繰り返してきた地球のようでもある。次に子どもたちは、その粘土の持つ可塑性を生かして作られた陶の表面を、手で辿る。このオブジェは、これから子どもたちが造形スタジオで体験することの出来る土の技法が集約された「手でみる惑星」なのである。

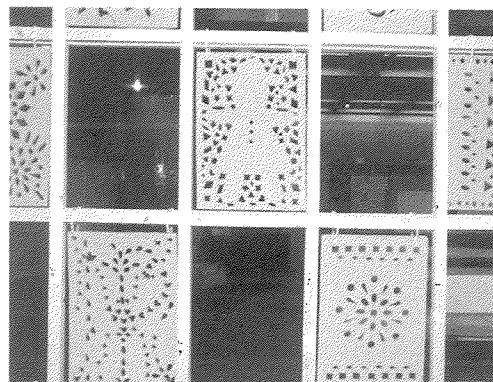
造形スタジオへ入ると建物、木、動物などの陶の一群がピラミッド状に展示されている。建ち並ぶ家と家の隙間を泳ぐ魚、木陰から恥ずかしそうにこちらを覗いている恐竜、そのひとつひとつの作品は、子どもたちが思い思いに作ったものだが、全体が一つのまとまった世界を形作っている。その反対側には焼け焦げ、井桁に組まれた丸太や炭の隙間から赤茶色に焼けた土器が点在している。野焼きの様子を再現したジオラマである。「木が燃えてる、燃えてる。」「あんなところから煙りが出てる。」とジオラマのリアルさに大人も子どもも目を見張る。ジオラマの奥に掛けられた「土をつくる」「土器をつくる」「野焼きの風景」の写真パネルが土の造形の全体像を浮かび上がらせる。ジオラマの隣には、指導員の作った穴の開いた陶スクリーンが天井から吊されている。アラベスク模様のようにあつたり、抜かれて残った形が木や動物であったりする陶のスクリーンの隙間から制作コーナーが見えてくる。このような展示の環境は、知らず知らずのうちに子どもたちに土への興味を起こさせ、土のイメージを視覚・触覚的に体験させていくものである。

II. 体験

「手でみる惑星…(中略)目をとじて、そっとさわってみてごらん。どんな場面がうかんできますか。」と書かれたキャプションが陶のオブジェの横にある。「なんだ、触っていいのか。」、見ることだけでは飽きたらなくなった子どもたちは、キャプションの言葉に誘われ思い思いの場所から触り始める。「わあ、すごかたーい。」「ザラザラ、でこぼこ。」「ひんやり冷たくて、気持ちいい。」「石みたいにツルツルしてる。」などと惑星の表面は子どもたちが想像していた以上にさまざまな表情を持っている。視覚的な印象と手から受ける陶の温度、湿度、そして、感触が制作への期待と意欲を高めていく。これから造形スタジオで体験するいろいろな土の技法が盛り込まれたこの「手でみる惑星」は、全て指導員の手作りである。粉状の二種類の粘土を水と混ぜ、足で練り合わせて出来たやわらかな粘土を型に張り合わせてから制作された。ひとつひとつの陶の表面は、型押し、削り出し、搾り出されたものである。子どもがそれを触った時に、土の持つやわらかさや強さと、それを作り出した人間の気持ちが体感できる。そして、「野焼きのジオラマ」は、土が火を通して変容していく姿を視覚的に伝えてくれる。その体験が制作の欲求の源泉の一つとなっていく。

III. 制作

造形スタジオ入口のたくさんの子どもたちの作品が、訪れた子どもたちを制作コーナーへと誘う。指導員のプログラムの説明に真剣に耳をかたむけながら、変幻自在に形を変えていく粘土の塊に、子どもたちの期待は広がっていく。そして、重くて少し冷たい粘土の塊を手にした時、展示作品を見たり、体験したことが甦ってくる。子どもたちは、粘土の量感、質感を掌だけでなく、体全体で感じながら制作を始める。子どものそれぞれの生活背景や造形体験が土の塊に変化を生みだす。「手でみる惑星」を触った感触からイメージするものが子どもひとりひとり違っているように、生みだされる作品はさまざまである。粘土が足りなくて自分の持つイメージに出来なくなり、もう一度粘土をもらいにくる子どももいる。土の持つ量感がさらに子どものイメージを広げていく。子どもたちが作った物のすべてがすぐに展示されていく。個々の作品が集まり、その集合体が、またスタジオの生きた環境展示となっていく。





プログラム1 ねんどで森をつくろう

木は、自然界についての人間の想像力を常にかきたててきた。人類の文化のあらゆる時代、地方にわたってその例を見ることが出来る。現代の芸術家では、モンドリアンの木の連作、エルンストの森の連作をはじめ、生命の源泉として、また死と再生、成長、共存などの象徴するイメージとして永遠のテーマとなっている。このプログラムは、そういった木の持つイメージを、小さな子どもでも形作れるよう、いろいろな方法で粘土の可塑性を体験しながら制作できるように設定した。

子どもたちは、指導員から受け取る粘土の量感に驚きながらも、ひとりひとりが木の形をイメージしていく。ひょろひょろと高く伸びた木、太くしっかりと根をおろした木、何本かの枝が曲がりくねって絡み合い一本の形を成している木。ころがす、丸める、つまむ、子どもたちがイメージした木は、粘土の持つやわらかさと強さでダイナミックに形作られていく。そして、木の持つ表面のテクスチャーを丸・四角の棒と藪を使って、再現する。出来た木は、展示台に飾られていく。一本一本の木は、異種多様であるが、それらは植林によって出来た森ではなく、自然に形成された森のようなおおらかさを持っている。



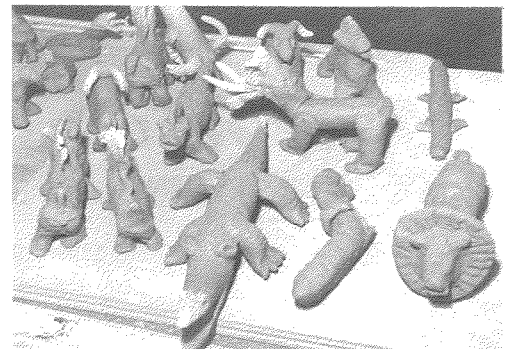
プログラム2 リング・リング・リング

直径75ミリ高さ30センチの円筒の塩ビパイプに新聞紙を巻きつけ、セロハンテープでとめる。粘土の塊を両手でころがすとひもが出来る。ひもとひもの両端をつなぐと一本の丸い輪（リング）になる。出来たリングを次々にパイプに張りつけていく。それぞれのリングどうしを指でつまんで、しっかりとつなぐ。リングの集合がひとつのマッスな形となっていく。ひもとひもをねじりあわせたり、迷路のようにつなぎあわせたり、土のひもからイメージは広がっていく。筒の頂上までリングが出来たら、そっと塩ビパイプを抜き取る。最後に残された新聞紙を捻るようにとると一瞬にして閉ざされていた円筒の柱に風が通り抜けていく。向きを変えて見ると、光を通し、土のリングが織りなすアラベスク模様のようなものである。子どもたちは、芯を抜き取るだけで空間が変化することの意外性に驚く。低年齢の子にとって、茶碗作りなどのためのひも作りは、とても集中力のある仕事である。しかし、このプログラムは、土のリングという楽しみを加えることで、小さな子どもの想像力に広がりを持たせている。



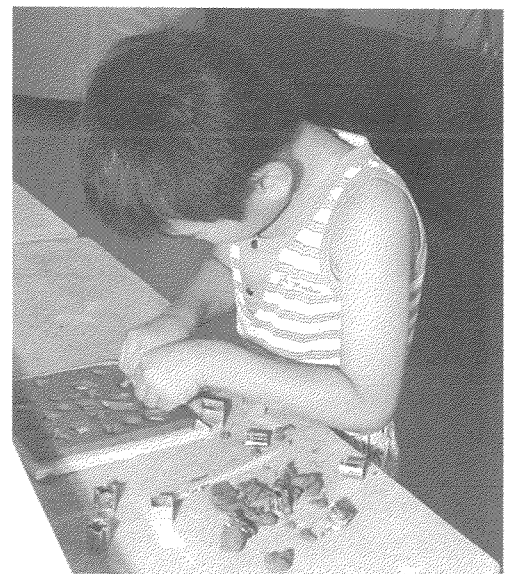
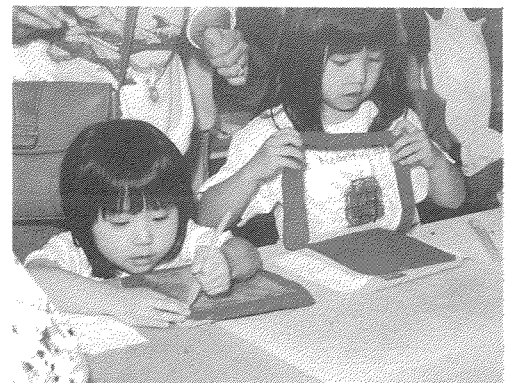
プログラム3 どうぶつをつくらう

小さい子どもたちは、どうぶつが大好きである。特にうさぎ、小鳥、猫などは身近な存在でそれぞれに愛くるしさがあり、制作の対象になりやすいものである。年齢が高くなってくると、怪獣や空想の生き物がふえてくる。粘土は、子どもたちがイメージした動物を作る時、どのような形態のものでも、具象化することのできる可塑性を持っている。粘土の塊から手、足、首…を捻り出していく。そして、貝殻やスタンプなどの道具を使い、思い思いの動物に作り上げていく。指導員のサンプルを真似て一生懸命に作ろうとしている子どももいれば、何かお話しを作りながら、たくさんの動物を作ろうとしている子どももいる。作ることへのアプローチはさまざまであるが、表現することの楽しさ、喜びを感じている。展示台の上に集合した動物たちは、動物園でもジャングルでもない不思議な空間を作り出している。それは、子どもたちの作り出したイメージのパラダイスなのかもしれない。



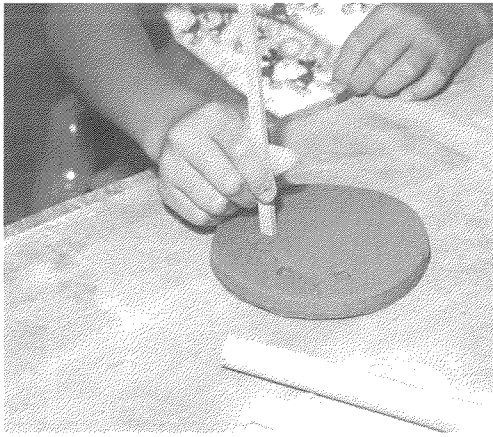
プログラム4 あなあきタイルをつくらう

子どもたちは、5ミリの厚さに切られたやわらかな粘土の板を晒布の上に乗せ、宝物を持つように制作テーブルへ運んでいく。それほど粘土の板は、やわらかく、ちょっとした力でその形を変えてしまいそうである。粘土を運んだテーブルの上には、15センチ角の塩ビの板と丸、三角、四角などのいろいろな形の抜き型がある。これは、一般に手に入るクッキー作りの道具や、造形スタジオ指導員の手作りのものである。不定型の粘土の板に塩ビ板をあて15センチの正方形に粘土ベラで切る。まだ、なんの跡もついていない平らな粘土の板のどこから穴を開けていこうか、戸惑う子どももいる。それは、画家が真っ白なキャンバスを前にした時の緊張感と同じ気持ちなのであろう。思いきって、抜き型を押し当て穴を開け始める。粘土の板に穴が開き、空間が生まれる。ひとつの形からイメージが広がり、子どもたちは連続して型を押し当てていく。一見、穴を開けていくという単純な作業のようであるが、ひとつの形がイメージを与え、何かを作ろうとする意志が働いた時、平らな粘土の板に生命が吹き込まれていく。粘土の持つ素材感とそれを抜き取る感触に魅せられた時、あなあきタイルには、描画では表せない不思議なリズム感が生まれてくる。



プログラム5 スタンプタイルをつくらう

厚さ1センチの粘土の板を直径10センチのステンレスの枠で抜く。その丸く抜かれた粘土の板に大小さまざまな丸と四角の棒でスタン



プしていくと、凹状の絵模様出来る。深く、浅く、斜めにしたり、転がしてみたり、子どもたちは、押し当てる棒から手に伝わってくる粘土のやわらかさを楽しんでいるかのようである。限られた道具を使いこなし、自由にデザインしていく。押し当てられ、連続した丸と四角だけの幾何学模様で出来るへこみは、木、花、動物などの有機的な形を生み出していく。何の変哲もない一本の棒は、子どもの手と一体化した道具となる。それは、直に手で粘土に触れることでは味わえない感触を子どもに伝えてくれる。

プログラム6 土で絵をかく

対象：小学校1年生～

ダンボールの板に下地の白い紙粘土をはりつけていく。親指でおもいきりぬりつけていく子どももいれば、小さくつまんだ粘土をすみから几帳面にはりつけていく子どももいる。次に赤茶色と青銅色の紙粘土を使って、絵を描く。三つだけの限られた粘土の色は、それぞれが一つのものの形になっているものもあれば、混ざり合い大理石模様のようにもなっていくものもある。しかし、それらはお互いに響き合いながら、形を成している。白い紙粘土の上に浮かび上がるその像はどことなくひ弱で存在感が薄い。貝殻や、ドライバー、ボルトなどで型押ししたり、引っ掻いたりしていくことで、粘土で描かれた猫や、魚や、木は突然、表情を持ち始める。それは、今までに子どもが実際に体験した感触からイメージしたものであったり、視覚的な体験から想像を膨らませて作り上げたものであったりする。それぞれの絵が持つ感触は、実体験からくるものであれ、想像からくるものであれ、手にした粘土のやわらかさが、より子どもの創造力をかきたてているのである。

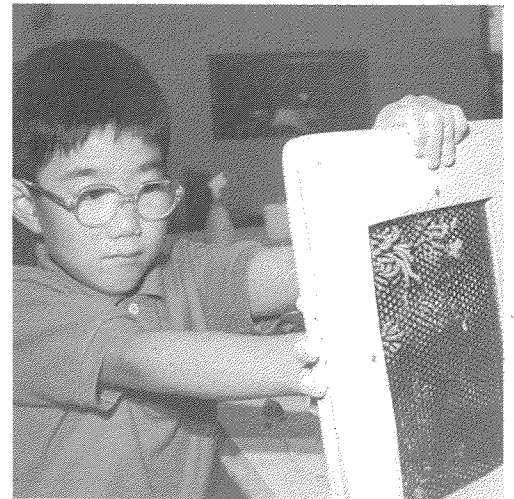


プログラム7 土で木をつくる

対象：小学校1年生～

自然の木をよく観察してみると、根はしっかりと大地をつかみ、幹は上に伸びるほど細くなって、細かく分かれた枝を支えている。種類が違えば、木全体のフォルムや葉の形もさまざまである。そんな木の姿を、子どもたちは、粘土の持つ誰でも簡単に立体に形作れるというやわらかさを生かして、表現した。「ねんどで森をつくらう」と同じテーマであるが、しぼり出しや型押し of 道具を使うことで粘土の可塑性をより幅広く体験できるように、対象を小学1年生以上に設定した。

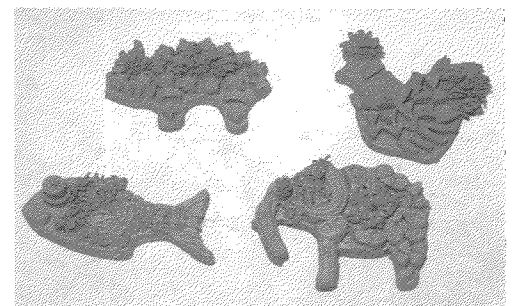
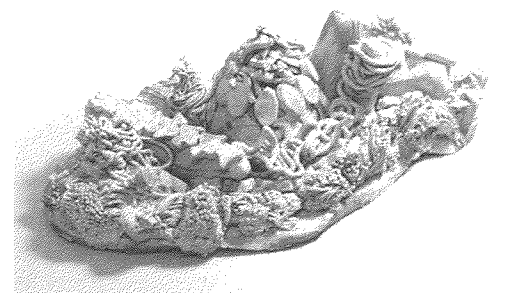
大人の拳より少し大きめの粘土の塊を、拳でたたいて平たくすると、木の育つ大地ができる。粘土をころがし、幹を作る。幹は、“のた”（粘土を水でゆるく溶いたもの）で大地に接着される。その幹から枝が伸び、さらに小さな枝に分かれていく。しかし、木は、まだ裸の状態のままである。しぼり出し器に粘土を押し当てたり、つめて押し出すと、粘土の塊はいくすじものひもに姿を変える。子どもたちは、それを葉っぱや草に見立てて、木に接着していく。自然の木が、気候の違いによって、一本一本その様子が異なっているように、子どもたちの作り出す木もさまざまである。それは、不思議な世界に育った新種の木である。

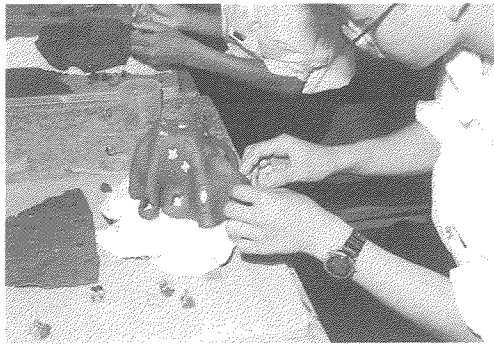


プログラム8 おもしろどうぶつタイル

対象：小学校1年生～

どの動物にしようかな。いく種類もの動物の抜き型が置かれている。子どもたちは、これから作り始める動物のタイルの形を決めかねている。ひとつの抜き型は粘土の板を押し抜くことで、何枚でも同じ形を作り出すことができる。ここで子どもが迷ってしまうのは、どの動物の型も魅力的に見えるからである。それは、たくさんの種類の動物クッキーから、どの動物から食べようか悩んでいる姿に似ている。「えいっ、..に決めた。」とやっと決心がつく。それでも、決められずに「自分で好きな動物、作ってもいい？」と指導員に聞く子どももいる。その子どもは、切り針を使って自分のイメージした動物を切り出していく。その動物の形の粘土タイルの上にしぼり出しの粘土や、幾何学模様の抜き型で作った粘土を“のた”で接着していく。道具によって、変わっていく粘土の形のおもしろさに、子どもは夢中になる。いつの間にか、平面だった動物のタイルは、ケーキのように装飾されていく。その装飾性を帯びた動物は、子どもが見たことも、触ったこともない空想の生物となる。

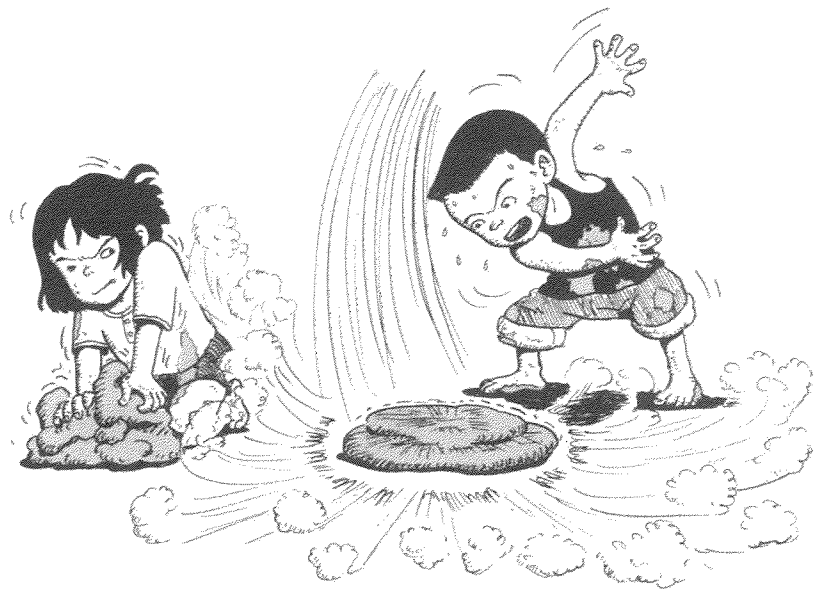
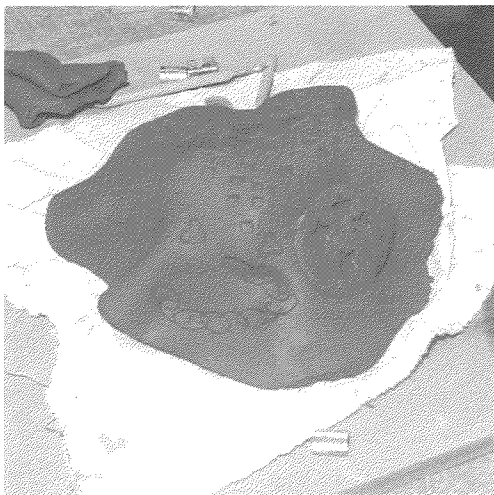




プログラム9 たたらオブジェをつくろう

対象：小学校3年生～

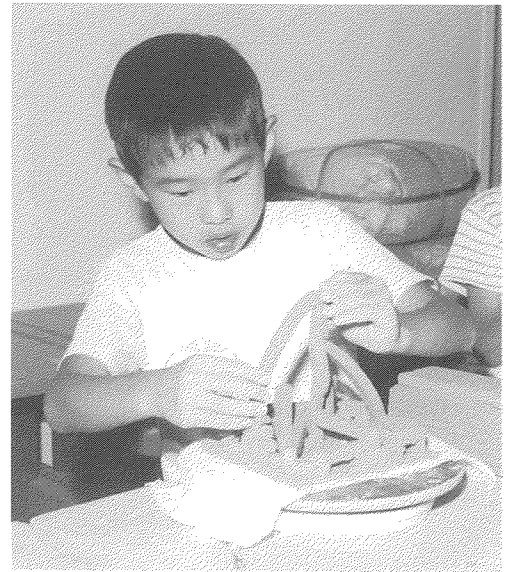
粘土の塊の両側に板を当て、切り糸で板の上を滑らすように切る。両側の板をはずしながら次々に同じ厚さの粘土を作る。この板がたたら板である。これは、焼き物を作る時の道具である。造形スタジオでは、たたら板を使って切り出した薄い粘土の板を、いろいろな物の上に落として出来る偶然の形をプログラム化してみた。子どもたちは、スタジオに用意された木のブロック、ボールの器やコップなどの中から3、4個を選ぶ。粘土を落として出来る形を想像しながら、ブロックなどを組み合わせた塊を作る。組み合わせた塊の上に晒布をあてる。粘土が乾燥した後、ブロックなどを取りやすくするためである。そして、塊の10センチ位上からそっと、粘土を離す。その土台の上に、いろいろな形にした粘土をはり合わせていく。ブロックなどを組み合わせた時に、イメージしたものを作っていく子どももいれば、出来た形から新たにイメージしていく子どももいる。大まかな凹凸は、子どもの想像していた形を成しているが、粘土の可塑性が作り出すやわらかな曲線には、想像以上の美しさがある。丸いボールの器から出来る半球の形は、子どもたちに顔の形を連想させる。また、起伏のなだらかな大地や、遊園地、車に見立てる子どももいる。しかし、このプログラムは、オブジェという言葉が示しているとおり、子どもたちの作品が具象的であれ、抽象的であれ、幅広い選択を子どもたちに与えている。



プログラム10 ねんどブロックのまち

対象：小学校3年生～

子どもたちは、四角い粘土の塊からたた板と切り糸を使って、2センチ角の細長いブロックをたくさん作る。それは、まるで大工が材木を鉋がけをするような繰り返しの作業である。次に、その粘土ブロックの集積から一本ずつ取り出し、15センチ角に切られた粘土の板に建物を作り始める。2センチ角の粘土ブロックは、大工が家を建てる時の材木のようなものであるが、粘土の持つ可塑性でその形態を変えることができる。子どもたちは、粘土ブロックを弓形に曲げたり、キャンディーのようにねじり思い思いの部材を作る。変幻自在に形を変える粘土が子どものイメージを広げていく。粘土のブロックを積み木のように積み重ね、“のた”でそれぞれのブロックを接着する。粘土ブロックが何段にも積み重ねられていくことで、建物の内と外との空間が生まれる。わずか15センチの粘土の板の上に有機的でやわらかな空間を作り出す。出来た建物は、展示台に置かれ小さな町を形作っていく。全体のマッサは、妙に現実的な町のようにもあるし、本の中で見た遠い異国のエキゾチックな町のようにもある。子どもたちは、自分の作った家の階段を一段一段昇り、屋上から周りの景色を眺め、スロープを滑り降りるように家の中を目で散歩していく。「ねんどブロックのまち」は、大人たちが忘れかけていた夢の町なのかもしれない。

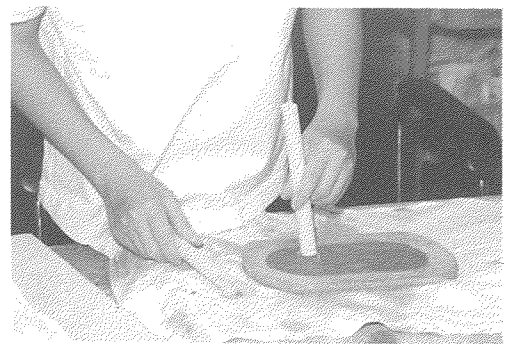


プログラム11 かざりタイルをつくらう

対象：小学校3年生～

やわらかな粘土の上にかたい物を押し当てると、そこだけへこみ物の形が閉じ込められたように残る。粘土に残されたへこみは、形の記録となる。粘土の上のマイナスの記録から、石膏を使ってもう一度もとの姿とそっくりな、プラスの形を取り戻すようにしたのがこのプログラムである。

内寸10センチ・厚さ1センチの正方形や円の木枠の中に、隙間なく粘土をつめていく。指跡などのでこぼこを木べらで削り平らにする。ネジ・歯車・ロープ・いろいろな形の工具や貝殻などを粘土に押し当てる。子どもたちは、押しあてる向きや並べ方そして深さで動物や模様を形作り、粘土タイルを作る。深く押し過ぎたり、浅すぎて思う形が残らず、何度も何度も粘土をつめなおす子どももいる。試行錯誤の末、雛型が出来上がる。この形の記録の板（マイナスの粘土タイル）を木枠からはずし、アクリル板の枠で粘土を囲み、水でドロドロに溶いた石膏を流し込む。へこんだところに流れ込んだ石膏はそのまま固まり、粘土をはがすと物の形が現れてくる。それ





らは、太古の化石のような物であったり、からくり機械の中身のようでもある。博物館に置かれた化石が遠い昔の地球の姿を想像させてくれるように、「かざりタイル」は子どもたちの記憶やイメージを伝えようとする小さなかけらなのである。

プログラム12 クレイストーン

対象：小学校3年生～

一見、ロゼッタストーンなどの古代エジプトの象形文字を配した石碑のようである。実は、滑らかで丸みのある石で磨いた生乾きの粘土に、釘や針で絵を描いたものが「クレイストーン」である。

この生乾きの粘土を磨くという手法は、低い焼成温度で釉薬をかけずに、水の漏れない土器を作りたいという必要性から生まれたと言われている。その起源は古代文明にまで遡るとされているが、現在でも釉薬の発達していない国々ではこの方法を用いている。

このプログラムは、無作為に割られた生乾きの粘土（槌で割ることのできる程度に乾燥した粘土）を箱の中から子どもたちが選びだすことから始まる。不定形の土のかけらは、「どの形にしようかな。」「この粘土、化石みたい。」「このザラザラの粘土がツルツルになるのかな。」と子どもたちに期待と不安をなげかける。土のかけらを紙やすりで磨き、大きなでこぼこをとり、スプーンやメノウ石を使って磨く。粘土の磨き方に正しい方法も間違った方法もない。円を描くように磨いたり、真っ直ぐに、そしてジグザグに磨いたり子どもたちのとる方法はさまざまである。大切なのは、根気よく全ての面を磨くことである。磨き終えた時の感触は何とも言えない。土の持つザラザラとした感じが石の表面のようにツルツルになっていくのを、粘土のかけらから子どもたちは体験していく。磨きあげた石のような粘土のかけらの表面に釘や針で絵や模様を刻み込む。ザラ

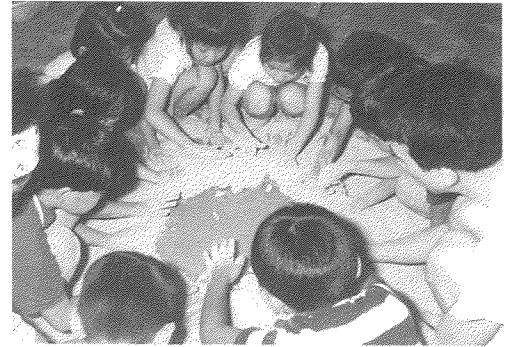


ザラだった土のかげらは、子どもたちの小さな小さな宝の石に生まれ変わる。

イベント—土をつくる

対象：小学校1年生～

粘土は、地球上どんな場所でも手に入れることができる。山から取ってきた土を乾燥させ、臼で突いて砕く。それを水に浸し、砂利を取り除いてもう一度乾燥させる。その土を槌で砕いてふるいにかけてものが粉状の粘土である。小麦粉のようにきめの細かい粉の粘土を堤防のようにして、そこに水をさす。土の壁がダムとなり、水を堰き止め蓄えていく。土の堤防の中に溜まった水に粘土の粉を入れる。水の表面が粘土の粉で見えなくなったら、少しずつ水と土を混ぜ合わせる。それを何度も何度も足で踏み、練り合わせていく。慣れてくると、子どもは足だけでなく体全体でリズムをとりながら、粘土を踏み込んでいく。「ニュル、ニュル、ベトベト…」子どもたちは、いろいろな言葉を使って粘土の感触を言い表そうとする。しかし、気持ち悪がる子どもはひとりとしていない。人間が本来持っている「気持ち良い」と感じる質感がそこにはあるからだ。粉の粘土が頬のやわらかさと同じ位に練り上げられていくと、粘土の出来上がりである。粉の粘土が泥に、そして泥が可塑性を持った粘土へと変わっていく様を体感していく。子どもたちは自分たちの力で作り上げた粘土を丸めていく。ひとり5キロ位の粘土の塊を一生懸命に転がし球を作る。次にその球をたたいてホットケーキのように板にする。板にした粘土を巻き込みころがしロープに、ロープを巻いて最後にはさいころにする。子どもたちは、さまざまな形に姿を変えていく粘土の可塑性と感触を楽しんでいく。その体験は、造形活動への大切なきっかけになっている。



造形教室

プログラム A 土のたてもの

対象：小学校3年生～

制作日数：2日間

バルテノン神殿、タージ・マハール宮殿、正倉院など洋の東西を問わず、昔から人間はいろいろな目的で数多くの建物を作ってきた。それは、人間が暑さ、寒さや風雨や攻撃から身を守るためであったり、鐘を取りつけ、時やメッセージを伝えたり、また、神を祭り祈りを捧げる場所として、原始時代から人間の物質的欲求と精神的欲求の両方を満たすために役立ってきている。建物を建てる条件の大きな要素として、建てる人間の財力・材料・技術・労働力がある。このプログラムでは、財力・材料は、造形スタジオにあるテラコッタ粘土であり、技術・労働力は子どもと指導員に委ねられる。しかし、一番大事なことは、子ども自身がどんな建物に住んでみたいかである。

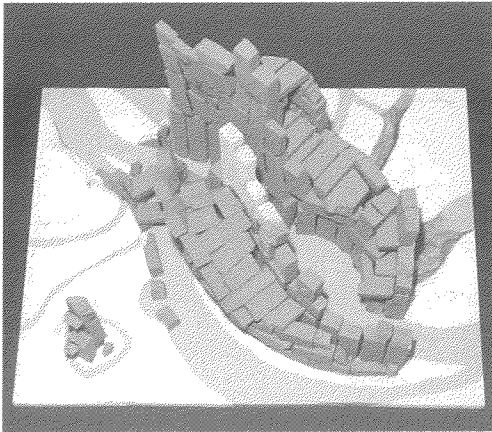
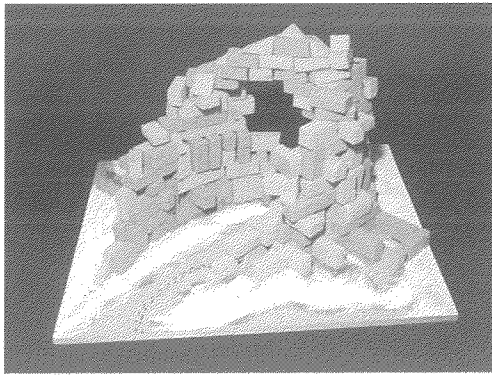
まず、子どもたちは、材料である粘土を作ることから始める。([イベント一土をつくる]と同じ方法で進められる。)出来た粘土をたたいたり床に押し当てて、10センチ×10センチ×20センチ位の長方体に形を整える。粘土の塊の両側にたた板を当て、1センチから2センチの幅で切っていく。縦、横、高さの三方から切られた粘土の塊は、たくさんの規則正しい小さな煉瓦になる。この煉瓦を焼成して、煉瓦用接着剤で建物を、白く塗った板の上に組み立てる。子どもたちは、いろいろな大きさの煉瓦を一段一段積み上げていく。迷路のように入り組んだり、摩天楼のようにそびえ建つその建物は、自分だけのイメージ空間を作り上げている。その空間の中に、高さ2センチ位の人形を入れると、建物のマッサは、より大きくリアルになってくる。それぞれの建物は、子どもの心の中を表した現実的・具体的な舞台装置なのである。

プログラム B クレイクッキング

対象：小学校3年生～

制作日数：2日間

手打ちうどんの店先で、うどんの生地を麺棒で伸ばしている職人の姿を見かける。「あっ、ねんどとおなじだ。」「ほくも、やったことある。」とそれを見た子どもは、直感的に粘土とうどんの類似性を言い当てる。うどんに限らず、料理と粘土の技法と道具には、両方に数多くの共通したものが見受けられる。切る、削る、押す、こねる、



にぎる、混ぜる、そして、焼く…といった方法。そういった方法を、よりスムーズに進めるために作られた麺棒、型抜き器、練り機、しぼり出し器などの道具類。それらは、可塑性のある素材を使って、何かの形を作っていく時のものである。このプログラムでは、積極的にそれらの技法と道具をとり入れてみた。

子どもたちは、粉から粘土を作る。直径18センチの円か正方形の型紙のどちらかで、厚さ1センチの粘土の板を切る。そして、幅4センチの長い粘土の板を作り、“のた”をつけて接着する。これが、粘土の料理を盛りつけていく弁当箱になる。子どもは、それぞれにどんな弁当にしようか、料理のマスタープラン（献立）をたてる。いろいろな道具と技法が、次々と料理の素材を作り出す手助けをしていく。洋風、和風、中華、エスニック…そして、子どもたちは全く見たこともない料理も作ってしまう。乾燥して、素焼きされた粘土の料理は、陶芸用の絵具で彩色され、低温焼成用の釉薬をかけ、もう一度焼成される。それは、粘土の可塑性という魔法のスパイスが、ほどよく効いた料理に仕上がる。

クレイ・メカニック・ワールド

対象：小学校3年生～

制作日数：1日

廃品置き場の山は、子どもにとって宝の山である。その山の中にテレビやモーターなどの機械部品があったとしたら、それは、子どもの造形心をくすぐるにはいない。分解して取り出した部品をつなぎ合わせては、ロボットや飛行機などに見立てて遊ぶ。多種多様の機械工具や部品を素材に、石膏の型取り技法で作られたのが、「クレイ・メカニック・ワールド」である。

直径15センチ位のボールの器の内側に、3～5センチの厚みで粘土を張りつけていく。ボルト・ギア・チェーンなどを粘土に、深く、浅く押し当てていく。押し当てるだけでなく、さらに粘土をつけたして、起伏に富んだ雌型にする。水と石膏を1：1の比率に溶いた液を型に流し込む。1時間もすると石膏は固まり、型にしていた粘土から取り出すことができる。子どもたちは、緊張しながら慣れない手つきで粘土を取っていく。取り出された石膏は、まるでSFの中の未来都市のようである。付着した粘土を水で洗い流し、メタリックな色のスプレーで彩色し、ガラスのドームを取りつける。これは、未来の地球の姿か、子どもの機械的なものへの憧れが生んだスペース・ファンタジー（SF）なのである。

